【地域情報】

聞き書き 天狗の声

聞き取り　平井亜未*
話　　横田弥三郎**・黒澤清三郎***
解　　説　加藤寛之****

キーワード：天狗、飯能、秩父

１．解説　飯能・秩父地域の天狗伝説

本稿は飯能・秩父地域の天狗伝説を概観し紹介するもので、網羅的なものでも学術的なものでもない。天狗に興味を持たれる方に導入のための読み物として受け入れていただければ幸いである。

天狗の話は各地にあり、飯能・秩父地域にもたくさん伝わっている。現在の飯能市の山間部は文化的に秩父の影響が強いことが知られており、一緒に扱っていいと思う。

太平洋戦争前から奥武蔵や秩父の山村を歩いて多くの見聞を残した神山弘は『増補ものがたり奥武蔵』に「奥武蔵天狗譚」の章を設けて、７つの天狗伝説を記している。それらは「天狗の提灯」「天狗の怪音」「天狗の休み木」「弱虫男に力をさずけた話し」「天狗猿・コーモリ穴の怪しい天狗」「天狗がくし」「椀貸し伝説」である。

飯能の郷土史研究に多大な功績をのこした新井清寿は、『飯能の伝説』の「天狗の話」の章に９編を記録している。神山弘の記録と同じらしいものもあって、「ちょうちんをつけた天狗」「天狗の灯」「いたずら天狗」「おこった天狗」「自慢男の鼻をへしおった天狗」「天狗かくし」「何も書いてない巻物」「力を授けた天狗」「逃げた天狗」の９編である。新井清寿は同一書名のガリ版刷り『飯能の伝説』にも、天狗について「天狗の腰掛松」「天狗松」の２編を収めている。

他の方の著述も含め、飯能地域にある多数の天狗伝説を整理分類した著述に、『飯能市郷土館研究紀要』第４号所収の村上達哉「飯能市域に残された天狗の伝説について」がある。飯能市域の天狗伝説を、光りにまつわる怪異、音にまつわる怪異、天狗の居場所にまつわる怪異、天狗がくしにまつわる話、人間へのいたずらなど、の５項目にまとめ、さらに寺院との関係にも触れている。飯能周辺の天狗研究には、便利な著述である。

秩父地域に目を向けると、坂本時次『秩父の民話と伝説』があり、これを原作とした山田えいじ『秩父の民俗と伝説等』には絵物語風にアレンジした「お天狗さまを見た話」「天狗さまのとまり木」が収められている。この「お天狗さまを見た話」は絵物語風ゆえに天狗像の期待を裏切らないと

＊　　城西大学広報課事務職員
＊＊　　平井亜未の母の父方の祖父
＊＊＊　平井亜未の母の母方の祖父
＊＊＊＊　元城西大学広報課課長

ころが貴重で、「神楽で見るあの姿そのままの衣裳を着て、一枚歯の下駄をはいて」「衣裳は金ピカに光って」いたのだという。なんとなく出来すぎ感はあるが、これなら一目で天狗と分かる。ちなみに前掲の「天狗猿」は猿の姿を天狗と認めた例（ホンモノの猿じゃないのか？）であり、村上は「飯能市域に残された天狗の伝説について」で飯能市域では「基本的に天狗の姿が現れない」としている。ほかには大田巌『奥秩父の伝説と史話』に「天狗の火の番」という話が載っている。これは火に関係している。秩父の天狗伝説はまだまだありそうだがこのあたりでやめ、次はお祭りの話にする。

天狗は怪異なものであるにせよ、昔は（あいまいで便利な表現だ）秩父の各地で、神として天狗をお迎えして祭る風習があったという。そのほとんどが昭和30年代に消えてしまったらしい。そのなかで白久のテンゴウ祭りは、埼玉県指定無形民俗文化財になっている。秩父市のホームページには「テンゴウ（天狗）まつりは、子ども中心の山の神、塞の神をまつる行事である。」「天狗様に一年の安泰を祈願する火祭りである。」とある。ただし「現在一時休止中」。平成22年11月20日に再興し開催されたときに、神事としての伝統と住民参加行事への転換や火の扱いで揺れたようだが、これは本稿とは別の事情である。

さて、天狗について、思ったところをいくつか書いておきたい。

天狗というと深山幽谷の感があるが、そうではない。天狗伝説の場所は、人が往来できるところである。村上は、飯能市域では子の権現付近が多いと指摘しているが、子の権現は戦前から奥武蔵の代表的な日帰りハイキングコースになっていて、それほど山奥とはいえない。人が行って天狗の気配を感じるのであり、人がいるからそれが伝わるのだ。当然といえば当然である。新井『飯能の伝説』（単行本）にある話のうち「力を授けた天狗」「逃げた天狗」は日高市にある日和田山がその場所である。城西大学のすぐ近くの山だから、どうみても深山幽谷ではない。日和田山の天狗については、こんなものもある。飯能の地元紙「文化新聞」昭和37年10月20日に「日和田山の天狗」という話が掲載されている。それは「りっぱな一人の大男」だったとある。天狗に性別のあることが面白い。読者の方はここに至るまで、なんとなく天狗に男性像を思い浮かべていたとは思うが。

最後に村上の著述に収録されていない、天狗の市街地出現例を紹介して終わりたい。それは小谷野寛一『続　民俗茶ばなし』に収録されている「川天狗」だ。山に住む天狗を「山天狗」、川に住む天狗を「川天狗」と分類（？）することがあるが、これは「川天狗」になる。それには「岩根橋あたりによく川天狗が出たという話が残っている。魚とりがメシより好きという橋のたもとのお爺さんが釣りをしていて度々川天狗にじゃまされた。」とある。展開としては天狗に釣りの邪魔をされたが、釣った魚の何匹かを置いて帰ると次は邪魔されない、という川天狗らしい話なのだが、注目は「岩根橋」「橋のたもと」にある。岩根橋は３代目から高所に架橋されており、そこは深い谷で両岸は崖である。「橋のたもと」らしい場所が存在するのは初代と２代目の岩根橋だろう。初代と２代目の場所はほぼ同じで、初代は明治23年（1980年）ころ建設、３代目は大正８年（1919年）架橋だから、その間の出来事となろう。架橋場所は飯能河原の西端である。当時の飯能河原周辺は飲食店や旅館が並ぶほど繁栄しており、今風にいえば充分に市街地である。こんな賑やかな場所にも天狗は現れていたのだ。

２．証言　天狗の声

これは、平井亜未が母の記憶をたどって聞き取り記すもので、大体今から60年くらい前、母親が10歳くらいのときに祖父達から聞いた話である。

母親の父方の祖父「弥三郎」の話

「今から100年くらい前。弥三郎お爺さんが山奥の川に行ったとき、奥のほうから蓄え地鳴りみたいな声が聞こえてきたという。場所は秩父の川、長瀞や親鼻のあたり。

魚が面白いように取れた時、ものすごく響く『ワッハッハ、ワッハッハ』という声が聞こえ怖くて魚を置いて逃げ帰ってきた」

母親の母方の祖父「清三郎」の話

「こちらも荒川の出来事。清三郎お爺さんが自転車で釣りに行ったところおもしろいように魚が取れ、持って帰るときに『おいてけぇ、おいてけぇ』とものすごく大きな声で言われ、必死で自転車をこいで帰ってきた。あまりの怖さに毛がウワーっと逆立ったと」

この話をする時、思い出しても怖いのか祖父の腕の毛や髪の毛も逆立っていたと話していた。